

## 校長ニューズレター（第17号・8月号） 宜野湾市立長田小学校校長：横山芳春



### 我喜屋監督は教師のかがみ

今年の夏は、ミャンマーを旅行した。ちょうど高校野球の前半とかさなっていた。我が興南高校が、3回戦まで勝ち進んでくれば、沖縄で観戦できるという旅程だった。ミャンマーでは、インターネットで試合結果はわかった。帰国途上の飛行機（ヤンゴンからバンコク便）の中では、読売新聞で2回戦の活躍を詳しく読むことができた。

さて、興南高校が甲子園で春夏の全国制覇をした。

我喜屋監督は、指導者はどうあるべきか、教育者とはどうあるべきかを、日本全国にしめしてくれたと思う。監督の数々の発言をひろってみよう。

監督の就任当初は選手が朝食を取らなかったり、寝坊して練習に参加できなかつたりがよくあった。監督は、

「なんくるないさじゃ、何ともならない。」  
と言い、寮の消灯時間を1分過ぎることも許さないほど厳格な指導をしてきた。

生活習慣が乱れていては、一流の選手にはなれない。自分をコントロールできるようでなければ、大舞台での試合にも平常心でのぞめない。

主将としてチームをまとめる我如古は、  
「私生活はこのチームにも負けないから、大舞台になるほど平常心でできる。」  
と言う。これこそ強さの秘訣であろう。

監督は、自律心（自分をコントロールできる力）をまず育てたのだ。それはつぎの発言からもうかがえる。

「選手達の散歩も始めた。見たり聞いたり触れた

り、匂（にお）いをかいだり、食事を含め五感を活性化することで小さなことから気づくように。小さなことに気づかない選手はサインミスを起こす、カバーリングを怠る、チームの約束事を守らない。いろんなケースで裏目に出る。」

わたしは常々、教師やリーダーは、その時々の子どもの課題を正確に見つけ出し、その課題を克服していく方法を見つけてやることだと考えている。監督はそのことを徹底して緻密におこなっている。

「去年は『勝てない興南』と言われたが、僕は焦っていなかった。『素晴らしい投手、先輩たちに、体も追いついていないあなたたちが急には打てないよ』と。」

「まずはバットを振り込むこと。外角、内角、高め、低め、（速球）150キロ、あるいは110キロ、緩急、球種、コースを意識し徹底的に振ろう。」

去年の夏、貧打で敗退した興南に向けて、「勝てない興南」「打てない興南」という非難がでていたことを思いだす。監督は、当時の課題を正確にとらえ、具体的な解決策をあきらかにして克服した。これこそが指導者のやるべき事だ。

春の大会を制覇した事が、最大の課題になった？

全国4千以上の高校の頂点に立つということは並大抵のことではない。高い、高い山の頂に立ったのだから。春夏連覇の困難さは、春の頂点に立ったことからくる。優勝した監督や選手達は、具体的な課題を見つけきれなくなるのだ。漠然とした夏の制覇など役に立たない目標だ。

我喜屋監督のすごさはここからだ。選手達に夏に向けて課題を提示しているのだ。

たとえば、エース島袋にたいしては、少々有頂天になっていることを戒（いまし）めて、一定の間、ボールを触らせずに草むしりなどさせたこと。高慢になっては、本人の力もだすことができない。さらに、新しい球種（ホークボール）を習得させた。新しい課題を提示してやることで、つぎの高い山へ向かわせたのだ。

勝つことが最終目的か？

監督はつぎのように話す。

「(社会人野球の時代、高校野球を見て)それでも勝ちに行きすぎていると感じることもあった。教育のためだが、本当にこの子たちが社会に出て通用するようなチームづくりをしているかという、疑問に思うこともあった。」

「だから、いかに社会人として通用する選手になるか。」

監督の人生は野球そのもの。野球で人生をおくられる人というのもめったにいない。ご苦労の連続であったと思う。そうだからこそ、社会で通用する人間を育てること、それがおおきな目的にもなったのではないか。すばらしい指導者だ。

「高校野球の監督は毎日水をやる、風を吹かせる、陽を当てるのが役目。種が大きく育ち、花が咲いた子は卒業していく。毎年その繰り返し。社会人、プロとちがって毎日、畑仕事のようなもの。」

「私がプレーするのではない。チームづくりをして、彼らを最高の状態にしてグラウンドに送り出すのが私の最大の仕事だ。」

学校の先生も同じです。授業をして、子ども達の可能性を最大限にひらいて、社会に送り出すのが教師の最大の仕事だ。

興南野球部の選手達は、とても謙虚だった。ホームランを打ってもはでなガッツポーズをしない。これも監督の影響だろう。

「胴上げ辞退は、『相手に対する配慮というか、遠慮というか』。」

監督が、他者にたいしてとても謙虚だ。その姿勢が、子ども達にも理解されているようだ。

このように優れた監督は、ほかのチームの監督にも影響しているのではないか。

準優勝した東海大相模の門馬敬治監督の泣きながらの発言。

「わたしがもっと優れた監督だったら一二三投手はもっと伸びただろう。」

もっとわたしが優れていたら・・・これは教師としての最高の言葉。

一二三という大会屈指の右腕に、つらくてみじめ思いをさせてしまった（興南打線に13点も取られ、敗戦投手に）。もっとわたしがいい監督なら、もっとこの子達を伸ばせたのに・・・という自責の念は指導者（教師）としていつも持っていたい誠実な思いだ。この夏、最高の言葉として受け止めた。

「とにかく子どもの成長を毎日見るのが楽しみで高校野球の監督になって一番よかったことだ。」

我喜屋監督のこの発言は、学校の先生や子育てをする保護者にとっても同じですね。

白球をおいかけた監督と選手達、素晴らしい夏をありがとう！

